

授業づくり FIRST STEP ―中学校道徳科―

1 授業構想は何のため？

- 学習指導要領では、新しい時代に必要な資質・能力を育成するために、「主体的・対話的で深い学び」を実現することが大切だと示されています。
- 道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を行うことが、道徳科における「主体的・対話的で深い学び」及び「考え、議論する道徳」ということにつながります。
- 授業を構想することで、生徒が「問題意識をもって授業に臨む」「自分との関わりで考える」「多面的・多角的に考える」「自分自身を振り返る」「人間としての生き方についての考えを深める」ことができる学習活動を行うことができます。



2 授業構想の手順と各段階のポイント

授業構想の手順に沿って、各段階のポイントを押さえているか□に✓を付けて確認しましょう。

(1)年間指導計画を確認します。

- ①年間指導計画を基に、授業で扱う教材と指導する**内容項目を確認**する。
- ②指導する**内容項目**に対する**生徒の実態を把握**する。

年間指導計画とは

全ての内容項目に基づいた指導を行いながら、生徒の実態に応じた道徳科の授業を行うための大切な指導計画です。道徳教育の全体計画に基づき、道徳科において指導しようとする内容について、生徒や学校の実態に応じて各学校で作成されます。この計画に則って授業を行うことで、全ての内容項目について漏れなく指導ができます。

内容項目とは

生徒が人間として他者と共によりよく生きていく上で学ぶことが必要と考えられる道徳的価値を含む内容を、短い文章で平易に表現した 22 の項目です。目標を達成するために指導すべき内容項目を A～D の4つの視点に分けて示しています。

A	主として自分自身に関すること
B	主として人との関わりに関すること
C	主として集団や社会との関わりに関すること
D	主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること

(2)指導の意図を明らかにします。

- ①教材、内容項目、生徒の実態を踏まえて授業のねらいを検討し、**指導の意図を明らかに**する。
- ②明らかになった指導の意図が最も端的に表された**主題名**になっているかを吟味する。
- ③道徳的価値の理解を踏まえて**教材を吟味**する。

「ねらい」とは

道徳科の内容項目を基に、ねらいとする道徳的価値や道徳性の様相を端的に表したものです。

「主題」とは

指導を行うに当たって、何をねらいとし、どのように教材を活用するかを構想する指導のまとまりを示したものが主題です。授業者の思いを込めて端的な言葉で主題名として表すことで、指導の意図が伝わるようになります。

1. 授業のねらい

2. 指導方法

(1)授業のねらいを達成するために、生徒の実態と教材の特質を押さえた発問を考えます。

- ①授業のねらいに深く関わる、**中心的な発問**を考える。
- ②中心的な発問を生かすための**前後の発問**を考える。

(2)(1)を踏まえ、学習活動をより効果的に行うことができる指導方法を考えます。

- 生徒が広い視野から多面的・多角的に考えることができる手立てや、授業のねらいとする道徳的価値を自分のこととして捉えることができる手立てを考える。
- 生徒相互の考えを深める中心的な学習活動である**話し合い**を取り入れる。
- 授業のねらいとする道徳的価値について、自分自身を振り返り、自らの価値観を見つめ、見直し、考えを深めたり、整理したりできるように**書く活動**を取り入れる。

※この他、以下のような工夫も考えられます。

教材を提示する工夫	表現活動の工夫	情報機器の活用
○教師が全文を丁寧に読み聞かせる ○意図的に分割して提示する ○教材のあらすじを紹介する程度で読み聞かせはしない ○事前に生徒に教材を読ませておく ○電子黒板に提示する ○紙芝居やイラストで提示するなど	○特定の役割を与えて即興的に演技する役割演技の工夫 ○動きやせりふのまねをして理解を深める動作化の工夫 ○音楽、所作、その場に応じた身のこなし、表情などで自分の考えを表現する工夫 など	○実態や問題を画像や映像、グラフ等にして示す ○自分の考えを1人1台端末に示す ○1人1台端末に示したそれぞれの考えを電子黒板に示して共有する ○1人1台端末に自分の思いを蓄積する など

上記に加えて、板書を生かす工夫や説話の工夫も考えられます。導入や終末場面でも指導方法の工夫は必要です。

⇒「[中学校学習指導要領\(平成29年告示\)解説 特別の教科 道徳編](#)」(以下、[学習指導要領解説](#)) pp.83～85

指導方法の工夫そのものが授業の目的にならないように留意しましょう。



(3)導入と終末で行う学習活動を考えます。

- 導入において、生徒に本時の主題に関わる問題意識や、教材の内容に興味や関心をもつことができる学習活動を考える。
- 終末において、生徒が学習を通して考えたことや新たに分かったことを確かめたり、学んだことを更に深く心にとどめたり、これからへの思いや課題について考えたりすることができる学習活動を考える。

3. 時間配分

●時間配分を決めます。

- 生徒が自ら考え理解し、主体的に学習に取り組むことができるように、「中心的な発問」について考える時間を十分に確保する。
- 生徒が自己を見つめ直し、人間としての生き方について考えを深める時間を十分に確保する。

- 授業構想における大切なポイントは、生徒に「何を考えさせたいか」「何に気付かせたいか」ということです。
- 授業構想の具体(例)を次に示します。



授業構想の具体 (例) 「[道徳科の授業づくりシート](#)」と併せてお読みください。

1. 授業のねらい

(1) 年間指導計画を確認します。

① 年間指導計画を見て、授業で扱う教材と指導する **内容項目**を確認する。【具体例】教材名「ネット将棋」 出典:『私たちの道徳 中学校』文部科学省 発行
内容項目 A-(1) 自主、自律、自由と責任

誠実な態度でネット将棋を楽しみ、実力を伸ばす「敏和」とは対照的に、「僕」はネット将棋を楽しめず、気分や感情に流されて、対戦相手や対局の結果に対して不誠実に振る舞っている。そのような中「僕」は、「敏和」の将棋や対戦相手への向き合い方を知り、一人笑えずにいた。本教材は、「僕」のどのようなところが誠実でないか、その行動の背景にある気持ちなどを自分自身と重ねて考えるを通して、人や物事に対して誠実であることの大切さについて考えることができる教材である。

② 指導する内容項目に対する **生徒の実態**を把握する。

学習指導要領解説の内容項目の概要には、「誠実な、自己を確立するための主徳である」と示されている。生徒は、人や物事に対して誠実であることができるだろうか。



部活動が新体制になったり、前期期末試験を終えたりと、8月から9月は様々な人や物事に向き合う機会が多くあったはずだ。今一度、人や物事に対して誠実であることについて考える機会をつくりたい。

(2) 指導の意図を明らかにします。 ※以下の吹き出し内の太字は、実際の授業で取り扱ったものです。

① 教材、内容項目、生徒の実態を踏まえて授業のねらいを検討し、**指導の意図**を明らかにする。

年間指導計画を見ると、ねらいは「人や物事に対して誠実であることの意義や価値に気付くことを通して、自己の行為やその結果に責任をもとうとする道徳的実践意欲と態度を育てる」となっている。



人や物事に対して誠実であろうとすることで、自律的な生き方ができるようになる。そうすれば、他者からも認められ、自分自身にも自信や誇りをもつことができるようになるのではないかな。

② 明らかになった指導の意図が最も端的に表された **主題名**になっているかを吟味する。

年間指導計画の主題名は「誠実であること」と記載されているな。



自主、自律、自由と責任の内容項目を通して、広い視野から「誠実さ」や「誠実であることの意義」について、考えを深めることができるようにしたい。

③ 道徳的価値の理解を踏まえて **教材**を吟味する。 ※「道徳的価値の理解」について  「[授業づくり FIRST STEP \(令和4年度発信分\)](#)」「僕」のどのようなところが不誠実だろうか…
・「敏和」との対局において、差し手を遅くして時間切れで逃げようとするところ
・ネット将棋において、勝っても負けても黙ってログアウトするところ

誠実であることは大切と分かっていても、なかなか実現することは難しいという人間の弱さを理解することが必要だな。「僕」に共感し、その行動の背景にある気持ちについて、考えることができるようにしよう。

2. 指導方法

(1) 授業のねらいを達成するために、生徒の実態と教材の特質を押さえた発問を考えます。

① 授業のねらいに深く関わる、**中心的な発問**を考える。

中心的な発問(例)

- 「敏和」のツツコミに笑えなかった「僕」は、何を考えていたのでしょうか。
- 「敏和」の対戦相手や将棋への向き合い方を知った僕は、何を考えていたのでしょうか。
- 「目には見えない相手とどう向き合うかで、自分が試されている」という言葉は、何を伝えようとしているのでしょうか。
- 「僕」と「敏和」には、どのような違いがあるのでしょうか(発問④)。

生徒は、「僕」の気持ちには共感できるものの、「敏和」のように誠実に振る舞わなければならないことも分かっているはず。「僕」と「敏和」の違いを考えるを通して、人や物事に対して誠実であるとはどのようなことかを、具体的にイメージできるように問い返しの質問を準備しておこう。

② 中心的な発問を生かすための **前後の発問**を考える。中心的な発問に至る **前**の発問(例)

- 徹底的に時間稼ぎをしていた「僕」や、ネット将棋に戦意喪失し、黙ってコンピュータ画面を閉じた「僕」は、何を考えていたのでしょうか(発問②)。
- 勝負に負けそうになったときに、投げやりになったり悔しがったりする「僕」の気持ちに、共感できますか(発問③)。
- 「敏和」は、対戦相手や将棋に対して、どのように向き合っているのでしょうか。
- このままの「僕」でよいのでしょうか。
- あなたは、「僕」と「敏和」のどちらに共感しますか。

中心的な発問に至った **後**の発問(例)

- 人や物事に対して誠実であるために、どのようなことを大切にしたいですか。
- “心からの「負けました」”を言うために、どのようなことを大切にしたいですか。
- 心から負けを認めることができる人で在るために、どのようなことを大切にしたいですか(発問⑤)。

中心的な発問で「価値理解」、中心的な発問に至る前の発問で「人間理解」、中心的な発問に至った後の発問で「他者理解」に関する発問を、それぞれの場面でしょう。道徳的価値の3つの理解を基に、「自己理解」につなげていきたい。

※「道徳的価値の理解」について  「[授業づくり FIRST STEP \(令和4年度発信分\)](#)」

発問は、生徒に考えるきっかけを与えるもので、授業者の発問の工夫なしに充実した生徒の学びを保障することはできません。それぞれの発問の後には、生徒の発言やつぶやき、表情などをしっかり受け止めて、問い返したり、切り返したりするなど、補助的な発問を加えながら話し合い、生徒が自己を見つめ、人間としての生き方についての考えを深めていけるようにしましょう。

【参考: 浅見哲也著「道徳科 授業構想グランドデザイン」】



(2)(1)を踏まえ、学習活動をより効果的に行うことができる指導方法を考えます。

【「話し合い」における工夫】

「話し合い」は、中心的な発問に至った後の発問の際に取り入れよう(発問⑤)。そうすることで、生徒はねらいとする価値に対して、多面的・多角的に考えることができるようになるのではないかな。

【「書く活動」における工夫】

誠実であることに関して、生徒がこれまでの生き方を振り返ったり、これからの生き方につなげたりすることができるようにしよう。自分自身とじっくり向き合うために、「書く活動」は終末の振り返りで取り入れよう。

指導方法の工夫は、道徳性を養うために行われる学習活動をより効果的に行うための「手段」であり、指導方法の工夫そのものが「目的」になってしまわないように留意しましょう。

(3)導入と終末で行う学習活動を考えます。

生徒が主体的に、自分自身との関わりの中で考えることができるようにするために、教材の中から問題点を見だし、その解決に向けた学習をしたい。
主人公である「僕」の行動やその背景にある気持ちに着目することができるようにしよう。

終末は、教師の説話でも問いかけをしてみよう。人や物事に対して誠実であることに関して、生徒が更に考えを深めることができるようにしたい。

導入(例)

- 将棋において「負けました」は、何のために言うのでしょうか。
- 「僕」のどのようなところが気になりましたか(発問①)。

終末(例)

- “Good Loser”とは、どのような敗者のことを言うのでしょうか。

●その他、指導方法の工夫ができそうな部分について検討します。

【「板書」における工夫】

多くの生徒が共感できると予測される不誠実な「僕」と、対戦相手を将棋に誠実である「敏和」を対比的に示そう。そして、中心部分を浮き立たせる板書にしよう。

発問に対して、生徒はどのような反応をするのかな。多くのことを想定して、問い返しや切り返しなどの補助的な発問を準備しておこう！
時間をつくって模擬授業をしてみよう！

3. 時間配分

●時間配分を決めます。

【教材を提示する工夫】

生徒が話し合いをしたり、深く考えたりする時間を確保するために、教材は朝の会の時間を使って範読しよう。将棋そのものが分からない生徒もいるだろうから、将棋についての話でもできたらいいな。

ここで大切にしたいことは、生徒が自己を見つめ直し、人間としての生き方について考えを深める時間を十分に確保することです。



【参考：浅見哲也著「道徳科 授業構想グランドデザイン」】

授業構想の手順に沿って作成した授業づくりシート (例)

1. 授業のねらい

道徳科の授業づくりシート

教材名	内容項目
ネット将棋	A-(1) 自主、自律、自由と責任
ねらいとする価値 (学習指導要領を基にした指導の要点)	
自ら考え、判断して行動し、人や物事に対して誠実であること。また、自己の行為やその結果に責任をもつこと。	
生徒の実態 (略)	

主 題 名	誠実であること
-------	---------

導入	・将棋の三礼に「負けました」というものがあります。「負けました」は、何のために言うのでしょうか。 ・「僕」のどのようなところが気になりましたか。
----	---

本時のねらい	人や物事に対して誠実であることの意義や価値に気付き、自己の行為やその結果に責任をもとうとする道徳的実践意欲と態度を育てる。
--------	---

2. 指導方法

基本発問 (中心的な発問を活かすための発問)	①徹底的に時間稼ぎをしていた「僕」や、ネット将棋に戦意喪失し、黙ってコンピュータ画面を閉じた「僕」は、何を考えていたのでしょうか。 ②勝負に負けそうになったときに、投げやりになったり悔しがったりする「僕」の気持ちに、共感できますか。
------------------------	---

中心的な発問	「僕」と「敏和」には、どのような違いがあるのでしょうか。
--------	------------------------------

指導方法の工夫	●発問に対する生徒の回答に問い返しをすることで、生徒が、人や物事に対して誠実であることについて、具体的にイメージできるようにする。 ●主題に対して、生徒が多面的・多角的に考えるために、中心的な発問に至った後の発問で、話し合いの時間を設定する。
---------	--

終末	書く活動を通して自己内対話を促し、これまでの自分の生き方を振り返ったり、これからの自分の生き方について考えたりする。その後、教師の説話を聞く。
----	---

(板書計画の例)	心から負けを認めることができる人で在るために、大切にしたいこと ・負けを受け入れる誠実な気持ち ・自分自身が、結果に納得できるだけの努力をすること ・相手がいてこそ試合ができるということを忘れないこと ・相手がいるから自分自身が成長できるということを見つめること
場面絵	『ネット将棋』 将棋の三礼のひとつ「負けました」 ・自分の負けを認めるため ・相手の勝利を称えるため
場面絵	敏和 ・負けでもそこから成長しようとしている ・相手のことも考えている ・正々堂々
場面絵	僕 ・何が何でも勝たいたい ・自己中心的 ・ずるい

学習指導プラン

中学校道徳科第2学年

主題名 誠実であること

内容項目 A-(1) 自主、自律、自由と責任

教材名 「ネット将棋」(出典『私たちの道徳 中学校』 文部科学省 発行)

1 本主題で扱う学習指導要領の内容項目

A 主として自分自身に関すること

自主、自律、自由と責任 (1)自立の精神を重んじ、自主的に考え、判断し、誠実に実行してその結果に責任をもつこと。

2 主題設定の理由

○ねらいとする価値について

誠実とは、自己を確立するための主徳であると言われる。他の視点の多くの内容項目にも関わる価値である。

中学校の段階では、様々な場面において競い合い、その中で自分を高めていく機会が多い。時には自身が望む結果にならないこともあり、過ちや失敗を経験しながら成長していく。また、自らの意思や判断で行動することも多くなり、その行動には責任が求められる。自己の行為やその結果、それらに関係する他者に対して誠実でなければ、自律的な生き方を確立することは困難になる。

自律的な生き方ができることで、自らの責任によって生きる自信が育まれ、他者からも認められ、一人の人間としての誇りをもつことができるようになる。自らを律し、自分や社会に対して常に誠実でなければならないことを自覚し、人間として誇りをもった、責任ある行動がとれるようになることが大切である。

○生徒の実態について

(略)

○教材について

本教材は、主人公である「僕」が、将棋仲間である「敏和」やネット将棋における対局に対して、不誠実に振る舞うことから、人や物事に対して誠実であることの意義や価値について考える内容である。勝ち負けのみにこだわるあまり規範意識に欠け、自分を律することができなかつたり、対戦相手や結果に対して不誠実であったりする「僕」に焦点化することで、自律の精神を重んじ、人や物事に対して誠実であることの意義や価値を考えることができる。また、「僕」のどのようなところが誠実でないか、その行動の背景にある気持ちなどを、生徒が自分自身との関わりの中で考えることで、人や物事に対して誠実であることの意義や価値に気づき、自己の行為やその結果に責任をもつことに関して考えることができる教材である。

○指導について

指導に当たっては、導入において、「僕」のどのようなところが気になるかを問い、教材の中から問題点を見だし、その解決に向けた学習を行う。その際、「僕」の行動やその背景にある気持ちに関して共感できるか否かを問い、道徳的価値について自分自身との関わりの中で考えることができるようにする。

展開においては、心から負けを認めることができる人で在るために大切にしたいことを問う。教材から離れて自分の体験等を想起しながら、ねらいとする価値について多面的・多角的に考え、話し合う中で、誠実であることの意義や価値に関して、自分なりの納得できる考えを導き出すことができるようにする。

終末においては、書く活動を通じた自己内対話を通じて、これからの自分の生き方についての考えを深めることができる時間を十分に確保できるようにする。

3 本時のねらい

人や物事に対して誠実であることの意義や価値に気付くことを通して、自己の行為やその結果に責任をもとうとする道徳的実践意欲と態度を育てる。

4 本時の展開

	学習活動	○主な発問 ○中心的な発問 ・予想される生徒の反応	◇指導上の留意点 予想される生徒の変化(教師の願い)
導入	1 将棋の三礼について考える。	○ 将棋の三礼に「負けました」というものがあります。「負けました」は、何のために言うのでしょうか。 ・自分の負けを認めるため ・相手の勝利を称えるため	◇ 投了や感想戦など、将棋ならではの言葉やルールについて補足説明し、なぜ「負けました」と自ら宣言するのかを考えることができるようにする。
	2 教材の中から「僕」の行動の問題点を見いだす。	○ 「僕」のどのようなところが気になりましたか(発問①)。 ・時間稼ぎをするずるいところ ・負けそうになると、黙ってコンピュータ画面を閉じたところ	◇ 「僕」に焦点化し、「僕」の行動のどのようなところが問題点と感じたかについて考えることができるようにする。
展開	3 問題点と感じた「僕」の行動の背景にある気持ちについて考える。	○ 徹底的に時間稼ぎをしていた「僕」や、ネット将棋に戦意喪失し、黙ってコンピュータ画面を閉じた「僕」は、何を考えていたのでしょうか(発問②)。 ・絶対に負けたくない ・早くチャイムなってくれ ・悔しい ・やっつけられるか ・やめたい ○ 勝負に負けそうになったときに、投げやりになったり悔しがったりする「僕」の気持ちに、共感できますか(発問③)。 共感できない どちらかというと共感できない どちらかというと共感できる 共感できる	◇ 教材の場面を想起させながら、「僕」に共感し、その気持ちを考えることができるようにする。 ◇ 生徒自身の体験等を想起させながら、自分の考えに最も近い意見に挙手することで、自分自身との関わりの中で考えることができるようにする。
	4 「僕」と「敏和」の違いを通して、人や物事に対して誠実であることの意義や価値について考える。	◎ 「僕」と「敏和」には、どのような違いがあるのでしょうか(発問④)。 ・「僕」は何が何でも勝ちたいのに対し、「敏和」は負けてもそこから成長しようとしている ・「僕」は自己中心的だが、「敏和」は相手のことも考えている ・「僕」はずるいところがあるが、「敏和」は正々堂々と将棋に向き合っている	◇ 「僕」の視点だけでなく、「敏和」の視点からも考えるように促すことで、人や物事に対して誠実であることに関して、多面的・多角的に考えることができるようにする。 「僕」の気持ちに共感する部分はある一方で、「敏和」のように、人や物事に対して誠実であることの意義や価値について考えることができる。
	5 ねらいとする価値を、自分自身との関わりの中で考え、話し合う。	○ 心から負けを認めることができる人で在るために、どのようなことを大切にしたいですか(発問⑤)。 ・負けを受け入れる誠実な気持ちをもつこと ・自分自身が、結果に納得できるだけの努力をすること ・相手がいてこそ試合ができるということを忘れないこと ・相手がいるから自分自身が成長できるということを自覚すること	◇ 個人で考えた後、周囲との話し合いを促し、人間としての生き方についての考えを深めることができるようにする。発表を通じて全体で交流し、自分の考えを深めることができるようにする。 人や物事に対して誠実であることや、負けを受け入れることなどの結果に責任をもつことで、よりよい自分になることができるということを感じることができる。
終末	6 本時の学習について、書く活動を通して振り返り、教師の説話を聞く。	○ 今日の授業における気付きや感想を書きましょう。	◇ 生徒が気付きや感想を書き、これからの生き方について考えるような自己内対話を終えた後に、教師が説話をする。